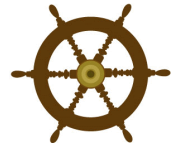


## この頃思ふ事



### 十五代 沈 壽官

古代ギリシヤにプラトンという哲学者がいる。プラトンはソクラテスの弟子であり、アリストテレスの師である。彼は言う。

『国は船であり、国民とは、強大な腕力を持った怪力の船主である。ただ、目がとても悪く耳が極端に遠い。政治家とは、その船の舵に取り付いている水夫である。水夫は盛んに船主を気持ち良くさせて、寝かしつけようとする。何故なら、船主が眠ってしまえば、船を何処に向けようと、積み荷をどうしようと彼らの思うままだからだ。』

この話、とても古代の言葉とは思えない。自分なりにこの話しの続きを作ってみた。

『何度も騙された船主は、荷物と船を管理するための管理人を置くことにした。(いわゆる役人である。)しかし、水夫はこの管理人をも操作し始めた。管理人の出世、序列を握る事で、水夫に擦り寄る管理人が次々現れ始めたのだ。困った船主は彼らを見張るための新たな仕組みを作った。自分に足りない視力と聴力を期待したのだ。ところが、水夫達は見張りに秘密を適時漏らす事で、この見張りすらも取りこもうとしている。いや、既に取り込まれつつある』

水夫の振る舞いは古代から現在にいたるまで変わらない。この厄介な一群を一体ど

うしたら良いのか。

例えば、現代に目を向けると北の王子様の暴走が止まらない。この水夫達も困ったものだ。

日本の水夫達はアメリカを通じて、国際社会、とりわけ中国がプレッシャーをかけるべきと繰り返し、ついには全面的禁油にまで期待している。随分、威勢が良いが、自分は決して一対一で立ち向かおうとはしない卑怯者だ。

考えてみると、今から約80年前、国際世論の反対を押し切り、隣国への武力支配を貫き、それを非難する国連をも脱退。飽くなき軍拡の末に、やがて国際的な包囲網による禁油の制裁を受け、ついに二進も三進も行かなくなり、斯くなる上はと開戦したのは一体誰だったのか？

身勝手に無謀な判断は、結果として無数の

未来ある無辜<sup>むし</sup>の船主を死に至らしめた。水夫も管理人も見張りも何の役にも立たないどころか、彼らの無責任さ故に凄惨な結果をもたらしたのだ。

しかし、水夫も管理人も見張りも未だに誰も責任を取らないまま、現在に至っている。彼等のいうところの国家という船は何なのか。それは恐らく船主（国民）不在の船を指している。従って彼等の言う『国の為に命を捧げた英霊』を翻訳すると『我々の為に命を棄てた従順な船主』となる。

こうした過去の経験から我々船主は何を学ぶのだろう。我々には我々の独自の道筋があるはずだ。過ちを糧としなければならぬ。殴り合いの経験も無い小狡い三世水夫達の男節など真つ平だ。そろそろ、我々船主はその怪力を発揮する時では無いだろうか。